

名事研ニュース

No.159

名古屋市立小中特別支援学校事務研究協議会

<http://meijiken.sakura.ne.jp/>

令和2年1月29日に第25回名古屋市立小中特別支援学校事務職員研究大会が『つながり ひろげ 学び 育む—子どもたちの学びを支援する学校事務のあり方—』をテーマに名古屋市教育センターにおいて開催されました。今号では研究大会や本年度行われた研修会について掲載します。

研究大会：研究発表

今回の研究発表では「つかさどる」に対する認識が個々に異なるという現状があることを鑑み、「つかさどる」のさらなる具体化の共有が必要との考えのもと、公費事務をつかさどる事例を紹介したうえで、会員の「つかさどる」意識の検証を行いました。

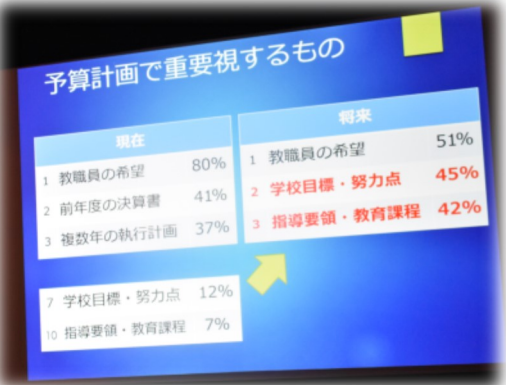
はじめに、公費事務における、事務をつかさどる事例を2件紹介しました。1件目の事例では、校舎の窓ガラスの飛散防止フィルムの設置について取り上げ、学校事務職員の視点で問題提案や情報収集する一連の行動から、「つかさどる」の具体的な実践例を示しました。2件目の事例では、学芸会予算について相談を受けた時の備品の購入の経緯を紹介しました。これらの事例から、公費事務をつかさどるための3つのポイントを整理しました。

さらに、今年度行った会員アンケートの結果から、公費事務をつかさどる意識と、具体的な行動についての現状をまとめました。その結果、つかさどるための3つのポイント全てを実践できていなくても、私達

は何らかの形で事務をつかさどる働き方に取り組んでいると考えられるとのことでした。さらに、予算計画で重要視するものに、つかさどる意識が現れており、学校事務職員が事務をつかさどることは、できる、として研究発表をまとめました。

研究発表の後、助言者である竺沙知章先生より、研究発表についてのご助言を頂きました。事務をつかさどるには、校務をつかさどる「校長」、教育をつかさどる「教諭」、事務をつかさどる「学校事務職員」の三者の関係を意識することが必要だという話がありました。

そして、他の教職員など、そこで働いている人の特性や学校規模によっても学校事務職員の立場が異なるので、その学校にあった「つかさどる」を意識し確立していくことが重要であるとのことでした。



研究大会：講演会

講演では、京都教育大学大学院 連合教職実践研究科 教授 竺沙知章 氏を講師に招き、「カリキュラム・マネジメントと学校事務職員の役割」をテーマに講演が行われました。

はじめに、学習指導要領が改訂されたことについてのお話がありました。学習指導要領の理解を深めて欲しい、新しい学習指導要領から、学校事務職員に求められる理想像が見えてくるとのことでした。

また、子どもの成長を支えることは学校だけで行えることではなく、家庭や地域社会との連携、協働が不可欠であるとの話がありました。例えば、学校間連携の活用などで人的及び物的な協力をすることや、世代を超えた交流の機会を設け、それを活発に行うことによって、子どもの成長を促すことも必要となってくるのではないかとのことです。

さらに、教員や学校事務職員が日々学ぶ姿勢を持って子どもたちと向き合い、学校という場をどのようにしていきたいか考え、常に問題意識を持ちながら行動することが重要であるとの話がありました。

そして、カリキュラム・マネジメントとは、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育の質の向上を図っていくことであるとして、これからは、学校事務職員もこのことを意識して仕事をする必要があるとのことでした。

また、宮崎県小林市を例に学校における財務マネジメントについて話をされました。PDCAサイクル(予算の編成、執行、評価の組織的な営み)という継続的な改善手法を取り入れた小林市で行っている事業型予算要求システム(『学校の教育目標の実現に向けて、何をやるか(事業)を問い、その事業を推進するために、どんな予算費目が必要かを考えるという仕組み』)について紹介されました。

最後に、全国的に調査を行った「学校予算に関するアンケート調査」から名古屋市の調査結果を紹介するなどし、名古屋市の教育や教育現場における現状分析や改善点などをお話いただきました。



研究大会：区研究報告

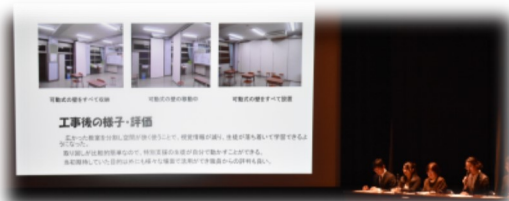
千種区

～工事・施設保全～

千種区は、施設の安全管理や施設整備工事をテーマに「工事申請」、「実際に行った工事の事例」、「施設保全、管理」の3グループに分かれて研究しました。

「工事申請」では、申請するための流れや手引きが体系化されていると分かりやすいとの考えから、これらをまとめた表が紹介されました。「実際に行った工事の事例」では、他校の参考になるような、新たな試みやねらいがある工事例についての紹介が行われ、工事に至る経緯や実際に工事を行ってみたいかを集約することで勉強になったとのことでした。「施設保全、管理」では、施設管理に関する情報が散逸するのを防ぎ、必要な施設に関する情報をいつでもだれでも手に取り、確認できるようにするため、工事関連の書類を1冊のファイルにまとめたとの発表がありました。

研究のまとめとして、これらの研究結果を活用することで、学校事務職員としての視点から、意見を出したり提案したりできれば、学校がより良くなることにつながるのではないかとの話がありました。



瑞穂区

～書類の管理・整備～

瑞穂区では、学校で作成が必要な書類の管理方法についての研究報告がありました。はじめに、学校で作成が必要な書類の管理状況についてアンケートをとったところ、書類が更新されていないかったり、形式だけが整っているが機能していなかったりする学校があったと報告がありました。そこで、担当課、通知、様式などの情報を一覧にして、書類の適正な管理に役立つ表を作成したとの発表がありました。

そして、学校としては稼働していないもの、時代に合っていないものは、整理や削減などの対応が必要であり、実質的な作業に係る表簿様式や学校文書分類表から不要なものは削減してほしいと要望をあげていくことも大切であるとの話がありました。また、今後もICT化が進む以上、この分野の校務分掌の増加が不可避であり、校務分掌の一つとして位置付けるなど、校内の仕事の一つとして認知することが必要ではないかとのことでした。

さらに、学校用PC管理台帳、ソフトウェアライセンス管理帳、外部記録媒体の管理などICT機器分野の書類は多岐にわたっており、加えて今年度からは校務用PCの管理も必要になり複雑さが増しているため、学校での管理により即したシステムに統合されるとよとの話がありました。



8/30 名古屋市学校事務研修会 講師：愛知県立大学教育福祉学部准教授 葛西耕介氏 「マネジメント力養成③ 構想」

8月30日(金)にウィルあいちにて、講師に、愛知県立大学教育福祉学部准教授 葛西耕介氏をお招きし、マネジメント力養成をテーマにした研修会を開催しました。本研修会は、学校事務職員に求められるマネジメント力を身につけるため、6回にわたって行うことを想定されている研修会の第3回目にあたります。研修会の内容は、もともとは教育長や学校長向けに作成され、全国の様々な自治体で、すでに実施されています。そんな全国的な研修会の内容を体験する、大変貴重な機会となりました。研修会は、①講義(約1時間)、②個人ワーク(約30分)、③グループワーク(約40分)、④全体発表(約40分)、⑤振り返り(約10分)の日程で行われました。

①講義

講師の葛西先生より、まずは本研修プログラムの概要について以下のような説明がありました。知識を行動につなげるには、応用力が必要。日本の研修では、知識の伝達講習が中心だったが、応用力は、本来経験で身につけていくものなので、学習だけでは身につけることが難しい。そこで、経験を研修プログラムにしたものがこの研修プログラムである。この研修プログラムは、PCで例えると、ソフトをインストールするのではなく、スペックを上げるようなイメージ。上げたスペックで、学校現場の課題に対応する為のもの。その後、第2回目までの内容の復習を含んだ講義を行っていただきました。

②個人ワーク

演習として、まずは個人ワークを行いました。お題は「学校教育目標を設定しよう」です。架空の学校「朝日南中学校」の資料を見て、最終的に実現したい生徒の姿を考えました。

③グループワーク

続いて、個人ワークで考えた学校教育目標について、グループで話し合いを行い、決めていきました。

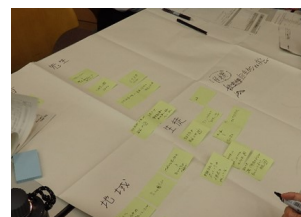
④全体発表

その後、それぞれのグループで決めた学校教育目標について、「説明会」を行い、発表しました。他のグループの参加者は、「保護者」「地域の人」といった立場で発表を聞き、質問をしました。

⑤振り返り

最後に、振り返りシートを使って、振り返りを行いました。その際、自分の思考のクセを認識しました。

休憩を含めて3時間以上の研修会でしたが、「時間が足りない。」という意見もいただくほど、充実した内容となりました。



7月19日(金)にイーブルなごやにて、講師に、愛知教育大学 准教授 風岡治氏をお招きし、子どもの貧困問題と学校をテーマにした研修会を開催しました。本研修会では、子どもの学びを保障する一助として、子どもの貧困問題・就学保障について学校事務職員として考え、実践することの意義についてご講演いただきました。

研修会の前半では、子どもの貧困とその対策についての現状や、子どもの貧困対策を展開するための「プラットフォーム」としての学校の機能について、風岡氏よりお話しいただきました。

①子どもの貧困と対策の現状

厚生労働省による「国民生活基礎調査」(2015年)によれば、子どもの6人に1人が相対的貧困の状態にあるといます。貧困と聞くと衣食住など生存に不可欠のものが欠乏している状態(絶対的貧困)を想像しがちです。しかし、相対的貧困の状態にある子どもは、見た目は普通の子どもと同じように見えることが多く、生活の苦しさを口にすることも少ないため、実態が見えづらく、どのように気づくか、どのように支援していくかが課題となっています。

子どもの貧困対策の推進に関する法律に基づき「子供の貧困対策に関する大綱」が閣議決定されました。この大綱では、①教育の支援、②生活の支援、③保護者に対する就労の支援、④経済的支援の4つの支援を重視して、子どもの貧困対策においては教育だけでなく福祉と連携した支援が求められていることが分かります。

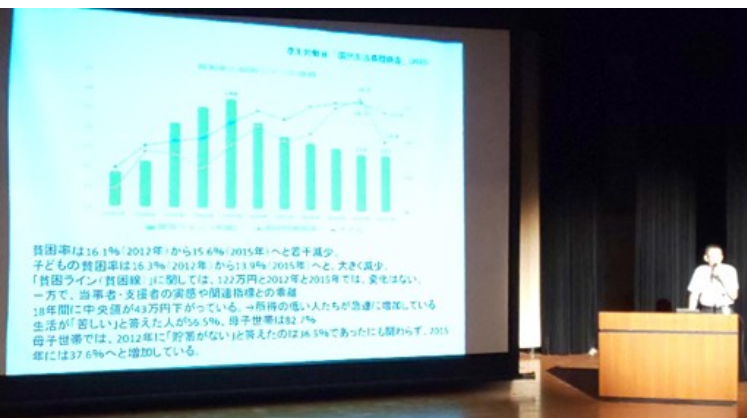
また、学校を「貧困の連鎖を断ち切るためのプラットフォーム」として位置付けていることも、この大綱において重要な事柄です。学校は、貧困家庭の子どもを早期の段階で生活支援や福祉制度につなげていくための地域拠点となることが期待されています。



②学校がプラットフォームとして機能するために

なぜ貧困対策を展開するための「プラットフォーム」は学校なのでしょう。個別の相談機関やサービス提供場所がありますが、それらを増やすだけではいつまでも支援が届かない人が生じます。貧困の可能性のある子どもや家庭を把握することができる機関は、就学後においてはすべての子どもを把握している学校しかないのです。

また、学校が「プラットフォーム」として機能するための成功のカギを握るのが、支援についての調整や支援の実施ができる人材との協働体制づくりです。コミュニティ・スクールの導入や「チームとしての学校」を具体的に機能させること、教員・学校事務職員など教職員が福祉・教育・心理を協働で学ぶことも求められます。



研修会の後半では、「学校事務職員が子どもの貧困に気づくとき」、「学校事務職員として、子どもの貧困をどのように支援しますか」の2つのテーマについて、グループワークを通して受講者どうしで意見交流を行いました。

また、一部の意見は受講者に発表してもらいました。「保護者に就学援助などの支援制度について周知した。」「保護者負担軽減のため、学校備付けの教材を公費で増設した。」といった取り組みが発表されました。名古屋市外からの参加者の意見も聞くことができ、子どもの貧困対策についての考えや実践を深めていくためのきっかけとすることができました。

本研修会を締めくくるにあたり、講師の風岡氏からまとめの言葉をいただきました。

子どもの貧困に対して、教員とは異なるアプローチで学校事務職員ができる支援とは何でしょうか。就学援助制度などによる経済的支援、学習環境づくりなどの教育条件整備、学校徴収金などの保護者負担軽減などがあげられます。また、福岡市では学校事務職員の定数を活用して、福祉の資格を持つスクールソーシャルワーカーとしての学校事務職員を採用しています。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった他の専門職とつながり一緒に支援していくこと、福祉機関や地域と関わり連携していくこともこれからは重要になってきます。

【受講者の声】※貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。一部を紹介します。

○日々の仕事に追われて、“子どものために何ができるのか”という学校で働く職員として一番大切なことを考える時間がなかなか取れないので、本日の研修会に参加できてよかったなと思います。学校間連携などでも子どもの貧困について話すことはあまりないので、今日のように集まって他の人の話も聞いてよかったです。

○今回の研修のタイトルを見た時からとても興味がありました。子どもの貧困問題がニュースなどでも取り上げられる中、学校事務職員としてもこの問題に向き合うことの重要性を学びました。先生方だけでなく事務でもできることがあるとグループワークや講演で知ることができました。業務に生かしていきたいです。

○豊橋市(東三河)より参加しましたが、他支部の方々と交流でき、グループワークのおかげで沢山の気づきがありました。学習の環境を整えるということから少しずつ行動していきたいです。

12/13 特別全体研修会 講師：教育研究者/学校業務改善アドバイザー 妹尾昌俊氏 「学校事務は面白い！～子どもの学びのためにできること、こんなにあります～」

12月13日(金)にイーブルなごやにて、講師に、教育研究科/学校業務改善アドバイザー 妹尾昌俊氏をお招きし、子どもの学びのために、学校事務職員には何ができるか考えることを目的とした研修会を開催しました。

本講演では、教職員の働き方や身近な校務改善を軸に、学校事務職員が何をできるかについて、妹尾氏よりお話しいただきました。

①教職員の働き方

まず、「修学旅行って、なんのためにやっていますか？」という問いかけがありました。学校で働いていれば「あたりまえ」のこととして受け止めている修学旅行ですが、例えば一人当たりの費用はバック旅行などと比較して高額であり、計画にかかる時間も数年単位で行うものです。このことについて会場の参加者同士で話し合いを行うと、「思い出づくりとして効果が高い」や「費用が掛かりすぎている」などの反応がありました。この問いかけは、修学旅行の意義を否定するものではなく、学校の「あたりまえ」を疑い、その目的を改めて考えさせるためのものです。

また、部活動を熱心に指導する若手熱血教師の過労死事例を出し、修学旅行の問いと併せて、学校の仕事は「なんのためにやっていますか？」という意識を掘り起こしました。子どものために学校の仕事はあるというのを前提に、ライフネット生命保険株式会社創業者である出口治明氏の「人は『本』『人』『旅』から学ぶ」という言葉を引いて教職員自身の学びのために時間も必要であると話されました。

しかし、教員の働き方を改めるために学校事務職員が多忙化するのでは、無理が来ることは明らかです。単純に仕事を肩代わりするという事ではなく、学校全体として「なんのために」という目的主旨を共有して、学校全体の長時間労働を減らしていく必要があると話されました。その中で、学校事務職員の立場から見えてくる手続き上のデータや法令などの知識を活用して、働き方改革や労務管理に貢献することができるということです。

②校務改善

学校全体の長時間労働をいかにして減らすかということについて、市や国の制度を何とかしてもらわなければ、と考える人も多くいます。もちろんそこは重要ですが、各学校の裁量で大きく変えていける部分もあると紹介されました。静岡県のある小学校では、学校の業務を洗い出して「やめる」「かえる」「減らす」に分け、業務削減を図っていました。遠足や家庭訪問などはやめる、プール清掃や駐車場の誘導などは業者委託にかえる、高学年担任の校務分掌の均など化や委員会の数を減らすなど、意外に多くの業務を学校の裁量で検討することができること話されました。また、横浜市立富士見台小学校の学校改善の例では、「半径3メートルからの学校改善」として、職員室内の情報の集中化や消耗品陳列方法の工夫などにより業務の効率化が図られたことが紹介されました。その中では学校事務職員も中心的な役割を果たしており、私たちにとって身近な改善実践例でした。

その後、自分たちの学校内でやめる、かえる、減らすを行えそうなものについて会場で話し合いが行われました。様々思いつくものの、なかなか実行されない理由として、「アイデアを出す場」「行動することを決める場」「フォローアップする場」が無いことが挙げられました。これはまさに学校事務職員ひとりでは無理な話であり、長野県塩尻市の教育事務協議会を紹介し、教育委員会と学校事務職員が膝詰めで協議する場を設定し、お互いの課題を共有することの重要性を話されました。

③学校事務職員のできること

中教審答申にもあるように、学校の働き方改革において学校事務職員への期待は大きいものになっています。しかし、学校事務職員が既に担っている職務も多く、ビルド&ビルドの発想では限界があります。そこで、「定型的・非定型的業務」、「全市的・各学校的業務」の軸で業務を仕分け、定型的かつ全市的業務は教育委員会主体による集中処理化などで業務削減。非定型的かつ全市的業務は事務長中心で対応し、事務長を定型的業務から解放する。そして非定型的かつ各学校的な業務にこそ、各学校の学校事務職員が力を入れるという体制に変化していく必要があるとされました。

そして、各学校における学校事務職員の関わり方として統計学者としてのナイチンゲールの業績を引き合いに出し、何かを改善する際のデータの重要性を明らかにしました。さらに公費執行を目的ごとにグラフ化し、その中で教育に関わる予算を見える化するという新潟市のある学校事務職員の実践を紹介することで、学校事務職員が子どものためにできることを話されました。すなわち、教材・備品の費用対効果の検討、予算のムダ・ムラを減らし改善にかかる予算を捻出する、経済的に支援が必要な家庭への支援を行政とともに企画するなどです。予算や情報といった学校事務職員の強みを活かすことで学校運営に好影響を与え、ひいては学校の存在意義である子どものための活動が充実することになります。

最後に、学校事務職員自身の業務もやはりスクラップ&ビルドを進めていくことを再度強調されました。上記の様な学校事務職員の強みをより磨いていくためにも、やはり時間を生み出すことは重要という事です。

